



えと文

上野富二郎

古い街の風景

古い街まちの風景がなぜか見る者に安らぎを覚えさせるばかりか、美しい風景として感動的に迫ってくるということ、そして絵を描くことを専門とする僕の知人に言わせると、こんなに美しい風景はないという。ヨーロッパでも特にイタリアあたりの中世の街を、熱にかされた様に、スケッチに明け暮れた旅の人はしを聞いた。新しい街はダメ、中世の街がいいのだという。なぜだろう。それらの古い街には今も貧しい人々が、(それでも楽しそうに)暮らしている。家々の屋根は何世紀もの間、同じスタイルで大切に修理され、生きのこってきた。その街の美しさは、単なる偶然などというものでは決してない。長い間風雪に耐え抜いてきた人々の姿そのものなのである。まわりの自然に逆らうでもなく、かといって打ち負かされることなく生きつづけてきた街。美しいのである。街の風景そのものが一つの意志として迫ってくる、だから美しい。僕はそう思った。

(女子中・高教諭)